

れほど名誉なことはありません。編集室へ入って本当によかったです。四月からは、資料室として新しいスタートを切るわけですが、これからも明るく、楽しい職場で頑張って下さい。

『名古屋大学五十年史 通史一・二』と私

(財)名古屋大学出版会 木和田 志乃

『写真集 名古屋大学の歴史』が刊行された頃、私は名古屋大学出版会に就職することが決まり、大学史の完結編『通史』を担当することになりました。それからもう四年。早いものです。

『通史』は一八〇〇ページ程ありますが、これだけページ数の多いものを担当するのは初めてでした。が、体裁なども八九年刊行の『部局史』とほぼ同じものにすればいいですし、また、入稿が遅れていたのは気になりましたが、かなり完成度の高い原稿がいただけるに違いない、と勝手に考え、当初、私は刊行までのスケジュール、作業の見通しを随分と楽観的に考えていました。

ところが組上がった校正を初めて大学史編集室に持つていつたころから様子が変わつてきました。まず、しきりに「校正を戻すのはいつまで待てるか」と尋ねてこられるようになりました。しかし「何日までに」と締切りを設定しても、全然戻つてはきません。ようやく返ってきたゲラは、どのページもどのページも真っ赤になり、あるいは差し替えや追加のための原稿がベタベタと貼り付けてあるありました。ある時は「よりよい通史を作るため」と言い聞かせ、仕方がないなあとため息をつきながら、ある時はどういう順序で読んだらいいのか分からない、誤

字脱字のある赤字を見て、この作業の膨大さはいったいどういうこと？と怒り狂いながらゲラに向かう毎日でした。

少しづつ少しづつ、確実に予定は遅れていきますが、刊行期日は変わりません。校了予定日は近づいてくる、やらなければいけない作業はまだ大量に残っている。与えられた時間はどんどん減り、苛立ちとストレスだけが増えしていく状況のなかで、なんとか校了にいたりました。この後は、印刷に立ち会つたり、装丁を確認するなどして、完成を心待ちにしていましたが、この時点で大きなミスが発見されたら全部刷りなおしになつてしまふと緊張していました。この緊張感は『通史』が完成するまで続き、ドキドキしながらページを繰つて、問題なく最後の一ページにたどり着いた時には、さすがにホツとしました。同時に気が抜けたのか、完成のほぼ一週間後には久しぶりの高熱を出して寝込んでしまいました。

私が『通史』と関わったこの期間を一言で言うと「大変だった」となります。が、この期間を通じて、大部な本をどのように効率よく作つていくかという編集上の知恵が多少なりとも身についたのではないかと思います（ただ、ゲラに少々の赤字が入つても何とも思わなくなつてしまつたのはよいことではありませんが）。また、学術出版に携わるものとして、研究と教育と出版の関わりを考えるいい機会にもなりました。それから私は名古屋大学の卒業生ですので、本文中に出でてくる人を何人か知っていますが、彼はこんなことをしていたのか、この工学部二年生とは誰それに違ひない、などと漠然と思いながら読み進めるのはそれなりに楽しい作業でした。

名古屋大学史編纂に取り組まれて一〇年余、ようやく完結編である『通史』が完成いたしましたことを心よりお喜び申し上げます。私も出版会職員として、また卒業生として、微力ながらこの事業をお手伝いすることができて嬉しく思います。最後になりましたが、ご協力くださいました全ての方々に感謝いたします。ありがとうございます。